

## 【ポスター発表】

## ソーシャルワーク教育と実践がもたらすものとは？

- マイケル・シュワナーとフランシス・パーキンス女史の足跡 -

富山福祉短期大学 根津 敦 ( 4 3 9 2 )

社会正義 価値教育 実践力

## 1. 研究目的

13年連続して自殺者数が3万人を超える“無縁社会”とも表現される今の日本社会は、新自由主義的グローバリゼーションの席卷や資本主義の暴走の結果によって生み出されたとも批評される。“貧困”という単語も当たり前のように入びとの間で使われ、“格差社会”も“一億総中流”に取って代わって日本社会を表現する言葉となった。このように社会正義が実現し難く変質した日本社会において、どのようなソーシャルワーカーが求められるのであろうか。社会福祉士の養成を基本とした教育は、現状の日本社会を変革する力を持つソーシャルワーカーを生み出すことができるのであろうか。

過去において社会変革や社会正義の実現に奮闘した人物の中に、ソーシャルワークを大学で学んだり、あるいはソーシャルワークの実践現場を経験したりした人びとがいる。例えば、ベバリッチ報告で有名なウィリアム・ベバリッチは、24歳である1903年から1905年まで、セツルメントハウスであるロンドンのトインビーホールで働いていた。そこでのウェッブ夫妻との交流から社会改良理論の影響を受け、老齢年金や学校給食の無料化のために活動している。社会保障に関する画期的な報告であるベバリッチ報告誕生の底流には、これらの実体験があろう。ソーシャルワーク教育やソーシャルワーク実践としてはまだ確立されてはいなかったが、当時のフェビアン協会に象徴される社会改良主義の教育的影響や貧民救済と言う社会事業での実践経験は、資本主義が勃興し貧富の格差を助長し戦争を繰り返して疲弊する社会を変革しようとしたベバリッチにとって、社会変革への動機・勇気・挑戦への核を与えたといえよう。

IFSWの定義では、「ソーシャルワーク専門職は、人間の福利（ウェルビーイング）の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り、人びとのエンパワーメントと解放を促している。ソーシャルワークは、人間の行動と社会システムに関する理論を利用して、人びとがその環境と相互に影響し合う接点に介入する。人権と社会正義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である」とある。社会の変革を進め、社会正義の実現にまい進した人物にとって、ソーシャルワーク教育やソーシャルワーク実践がどのような影響を与えたかの分析を通して、今後のソーシャルワーカー養成の指針への提言を行いたい。

## 2．研究の視点および方法

2 人の人物の活動の歴史をたどりながら、ソーシャルワーク教育とソーシャルワーク実践の経験と、その後の二人の活動を結びつけながら、分析・評価する。一人は、公民権活動家のマイケル・シュワーナーで、コロンビア大学大学院でソーシャルワークを学んでいる。ミシシッピ州での活動中、他の二人の活動家とともに、白人至上主義の秘密結社であるクー・クラックス・クラン（KKK）によって殺された。アメリカの公民権の歴史においても大事件であり、映画「ミシシッピ・バーニング」として描かれており、いまだにこの事件について語られている。

もう一人は、アメリカ史上最初の女性閣僚となったフランシス・パーキンス女史である。フランクリン・ルーズベルト大統領がもっとも信頼していた閣僚が彼女であった。貧困にあえぐ労働者や高齢者のための福祉政策を次々と打ち出し、労働長官閣僚として活躍した。その彼女は、25歳ごろシカゴのハル・ハウスで活動しており、ジェーンアダムズとも交流をしていた。

この二人の足跡を明らかにして、ソーシャルワーク教育と実践経験との関係を分析する。

## 3．倫理的配慮

日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づき配慮しながら、公的に発表されている文献や資料等のみを参考・使用した。

## 4．研究結果

マイケル・シュワーナーは、ミシガン州立大学で獣医を目指していたが、コーネル大学へ移り社会学を学び、コロンビア大学大学院でソーシャルワークを学んだ。ミシシッピ州で公民権活動を行い、黒人のためのコミュニティセンターを設立した。ソーシャルワーク教育の影響として見られるのは、単に黒人のための権利擁護ではなく、白人労働者層との連携を模索したように、常により広い視点での人権侵害を問題として、社会正義の実現を図っている点である。また下からの草の根運動を重要視し、人々の家を一軒一軒回って話をする活動をしている。原動力となっているのが、「すべての人びとは本質的に善である」という信念であり、ソーシャルワークの価値と倫理と密接な関係が見られる。

フランシス・パーキンス女史は、シカゴのセツルメント運動の拠点であるハル・ハウスでの活動経験があり、生活困窮者と出会い貧困の実態を日々実体験しながら知った。そのことが自己責任ではなく、社会問題として貧困を捉える視座を養い、労働運動を1929年の大恐慌に対して実施されたニューディール政策へ盛り込むことに努力した。ニューディール政策は国家介入の景気浮揚策として評価されるが、この政策推進の大きな柱の一つが労働者の権利拡大や労働環境の改善であり、特に、失業給付・老齢年金・貧困層への福祉対策などを含んだ社会保障法を成立させたのである。

ソーシャルワーク教育は国家資格をもつ施設職員の養成ではなく、また施設での福祉実践が福祉活動の第一義的課題目標ではない。社会正義を実現するために社会変革に挑戦する担い手にとって拠り所となり、実践への勇気を与える価値と倫理を涵養する教育と現場実践が必要である。